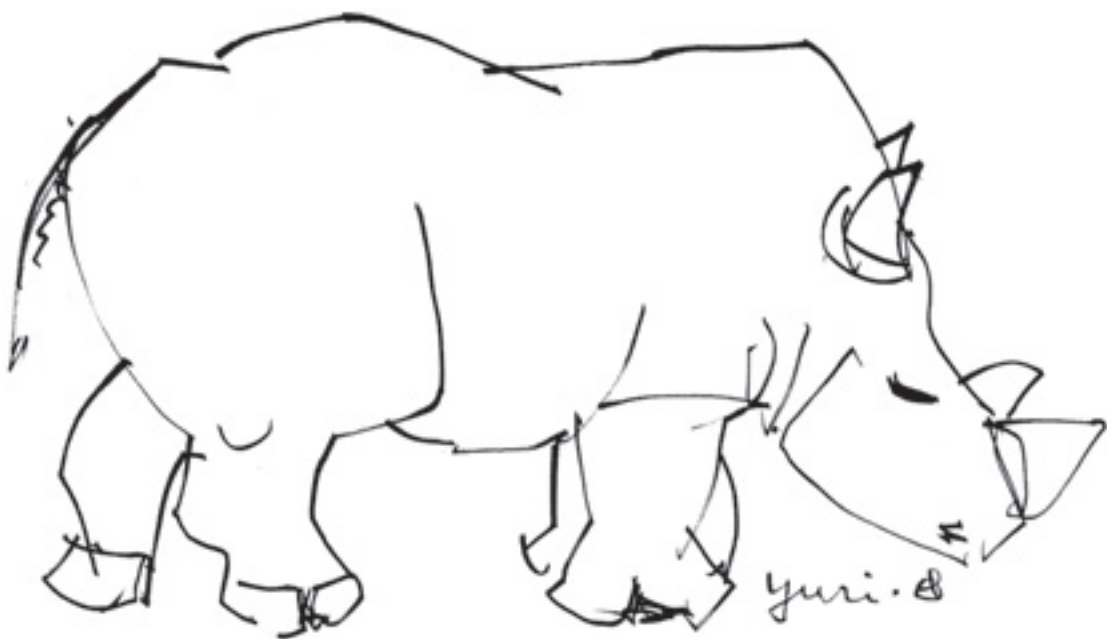


三河アララギ

平成二十四年

十一月号

第五十九巻 第十一号



ニューヨーク日記(73) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

June 2, 2012 : VC Pojo Classic

Blue Shoe Diaries



毎年夏恒例のヴェーヴ・クリコ主催のポロ・イベントにピクニックバスケット（今回は自分で作って!）持って行ってきました!青空のしたでピクニック食べながらシャンパン（もちろんヴェーヴ・クリコ）飲んで、ポロ観戦。いい感じでしょ?今年もアルゼンチン人プレイヤー Nacho Figueras が大活躍で試合勝ったよ!

It's almost getting to be tradition. This year again, we went to see the Veuve Clicquot Polo Classic starring (?) none other than Argentine player, Nacho Figueras. The Polo venue was a bit more intimate with a great view of the NY skyline and also the Statue of Liberty. Pretty picturesque, no? Imagine a home made picnic while sipping champagne, while watching a polo game on a beautiful summer day with pretty people dressed in their best summer dresses (and lots of seersucker pants for the gents). Yes, it was exactly that!

目次

第五十九卷第十一号(通卷七〇七号)

表紙 サイ	今泉 由利 (1)	ひととき	白井 信昭 (27)
ニューヨーク日記(73)	Blue Shoe (2)	さんざめき	清水 慶章 (27)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	現代学生百人一首	東洋大学 (27)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	ピアノ発表会	阿部 淑子 (28)
うるこ雲	岡本八千代 (6)	夕顔	富岡 和子 (28)
羽毛恐竜	今泉 由利 (7)	「ことよせ」	いーはとぶ (29)
同じ紫	弓谷 久子 (8)	私の一首	伊藤 忠男 (30)
仲秋の名月	青木 玉枝 (9)		半田うめ子 (30)
えのころ草	内藤 志げ (10)		弓谷 久子 (31)
「あさぎまだら」	佐藤 喜仙 (11)		安藤 和代 (31)
過疎の里	林 伊佐子 (12)	俳句	植村 公女 (32)
私の心	安藤 和代 (13)		一石 (32)
曾孫咲季	金津 文枝 (14)		喜仙 (33)
古稀	伊藤 忠男 (15)		皓一 (33)
雛鳥	胃甲 節子 (16)	贈呈誌	
ひんがしの空	伊与田広子 (17)	子規の短歌革新とアララギの歌人(4)	佐藤 喜仙 (35)
栗の実	半田うめ子 (18)	ある自然科学者の手記(6)	大橋 望彦 (36)
初秋の気配	近藤 映子 (19)	絹の話(24)	今泉 雅勝 (38)
武者隠し	清澤 範子 (20)	物理学者と詩歌の世界(34)	一石 (40)
哀しいから	杉浦恵美子 (21)	短歌に詠まれた茂吉	鮫島 満 (42)
胡麻	堀川 勝子 (22)	水戸紀行(2)	夏目 勝弘 (44)
故郷の川	平松 裕子 (23)	「氷魚」のことから(142)	岡本八千代 (45)
桃子のハガキ	山口千恵子 (24)	ことのはスケッチ(407)	今泉 由利 (46)
仙人掌	小野可南子 (25)	和菓子街道(73)	平松 温子 (47)
ノ木偏に火	夏目 勝弘 (26)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	(48)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集「御津磯夫歌集」

閉ざしたる部屋の机に一花の白き皐盧の花をとり替ふ

P
66

そがひには竹の穂ゆるくゆらぎつつ夕日に赤き赤松の幹

P
69

歌集 「一本の木」

杉 浦 弘

吉宗の世より立ちたる花の木と木ささげ聳ゆ薬園の森

立像の薬師佛の腰の辺に截^{きりがね}金残り光れりいまに

今日ひと日読まず記さず考へずひと足家を出でず過ぎにき

うつろこ雲

蒲郡 岡本八千代

いつしかに秋風の吹き来^こ吊したる竹管の風鈴に鳴る君の音

開きたる「祇園精舎」の頁より大き紙魚一つ白光り速し

白光りしつつ速き紙魚一つ殺してしまへりああわが無常

子規の忌の九月十九日また今年もわれに淡々とすぎゆきにけり

ふがひなさに仰ぎたる空にうろこ雲の動かざりせばそれもよきかな

海の方にサバ雲長しけふの空一つ一つの鱗のあはれ

渺^{びよう}々と白き浮き雲うろこ雲今より流るる行方は知らず

今宵また新しき十三夜出でてをりわれも新しき心に老いつつ

海の上の東に低き十三夜淡き光りに細波ゆれつつ

子規の忌を瀬^{だつさい}祭忌ともいふを知るなぜか愉しき今夜のわれは

羽毛恐竜

東京 今泉 由利

黒雲はますます黒く雨激し恐竜化石に逢ひにかゆかむ

単一の公孫樹の葉っぱの散りばへりしかと立ちをり羽毛恐竜

巨ひなるトンボの目玉と睨めっこジュラ紀の化石をしばし離れぬ

3Dの映像の中へ3Dの私入りゆくティタノサウルス

地球にて時代異なる恐竜の化石の間に間しばしたゆたふ

ひとつひとつ同じではない安心とみんな同じに見ゆる安心と

一年の程の間に間に恐竜は羽毛が生えぬ羽毛恐竜

熱帯の魚のやふ鳥のやふ極彩色になりたり恐竜

限りなく太古の時に戻りゆくCTスキャナー電子顕微鏡

恐竜の大腿骨に伝ひゆく私の今日の手の温もりは

同じ紫

豊川 弓 谷 久 子

昔子に着せし振袖と年毎に咲く我が朝顔と同じ紫

ひとにぎり庭草引きてはや休む残暑は今日も続きてをりぬ

疲れる前に休むがコツとさとされし翁の言葉胸に繰りをり

稲田へと移り行きしか我が餌に寄り来る雀めつきり減りぬ

「又一緒に京都へ行こうよ」と書かれをりみさとの呉れし誕生カード

坐したまま百日紅の花見よと茂りし庭木子が剪りくるる

業平が名付けしと聞く万葉椿挿し木の三本根づきくれたり

葉の先が金魚の尾びれにさも似をり万葉椿我が宝物

交通事故に気を付けてねと今年も届く学童よりの敬老葉書

背を向けて歩み行く夫をまざまざと夢に見にけり彼岸も終る

仲秋の名月

新城 青木玉枝

春も逝き盆も彼岸も早すぎて七ヶ月住む山里のわが顔

仲秋の名月見上げ越し方の思ひ出たぐる吾が生きしページ

山里はどの家の庭やにも風車カラカラ回り吾が庭もカラカラ

道しるべ頼りて手押車ておし引いてゆくこは鬼久保村おにくぼの憩ひ場所

秋彼岸梵鐘ひびく寺の前夫の墓参に行きたし思ひ

息子にも私もあんななつかしい時代があつたと暫しみとれて

テレビにて稀に見る海伊勢の海夫の骨まきて早三十年余

故里の砂浜ふみて貝拾ふ夢ばかり見る後の侘しさ

ひと握りの蒨蓐草ほうれんそうをゆで上げて夕卓の一品となるわが食事

山里を夕茜染め沈む陽に重ねる老いを熱く包めり

えのころ草

豊川 内藤 志げ

道沿ひに高く低くと穂の並ぶえのころ草も美しきかな
薄緑いつしか実りの色となりエノコロ草の穂は傾けり

朝夕に水を運びし今朝の土黄に二葉の人参の芽

そうめんに茄子の煮かけはわれの味二人の食事稀れまれにして

白菜にキャベツ人参ブロッコリー屋敷の畑に並べ蒔きたり

石の橋足許気につけ渡りたりデイゴの花は沖縄の花

富士山に登るべからず綱張らるわれにも登れる富士山なのに

福田様に伴なはれしは幾年前ミニ列島の富士山と歌碑

実を扱ぎに紫蘇の香る香かほの中に実りよろしき秋風の中

紫蘇の実穂先に花の残る頃今年は醤油の漬物に

「あさぎまだら」

東京 佐藤 喜仙

内湾に短竿たわむ鯨日和釣られし鯨のおどろく目玉

寝ねがてに窓開け虫の声聞くや夜風も入りて頬を冷やせる

葛の葉の葉陰にひそと咲きてをり花はむらさき気高くもあり

大空を画布といたし揚花火高々揚り大きく咲きぬ

さなきだに残暑の厳し不忍の池に潜ける鳩の親と子

夕は秋と清少納言書きてをり千年経てもなほ夕は秋

ひさかたの短かき雨に虹立ちて道に残れる水に映えをり

夕まぐれ迫り蜉蝣羽化始む薄明の川にいをはねる音

草枕あまたの日数旅寝して防人偲ぶ残せし妻子

あしひきの水がき山の岩肌にあらぎまだらの休らひてをり

過疎の里

岡崎 林伊佐子

舗装されず草茂りたる過疎の里帰省するたび夫の草刈り
鳥獣の作物あらず生き物の住む人よりも多くなりたり
年輪の殖えつつ樹々の幹太り山家を囲み木立ちとなりぬ
高齢化、獣の被害にふる里は休耕地も増す深刻さながら
蛇行して行く山道にわが夫が残して置きし竜胆が咲く
草をとるわが身に汗は噴き出づる朝日さしそめ畑やすらけき
朝あさに露ながら取る茄子トマト飽くることなく料理たのしむ
一人なればひとりの心遊びつつ吾の試作の農耕おもへり
色づきし稲穂に混れる稗草にわがふる里の棚田をおもふ
一人暮らしの老婆に配る茄子トマト歓迎うける笑顔の喜び

私の心

豊川 安藤 和代

秋桜が小さく揺るる朝の庭私の心もやさしくなれり

折をりに吉祥山を詠みし御人久吉様の御歌恋しき

娘の住める町を通ればそれだけで心弾みて多弁となるよ

お隣りの幼の口づけ受けし夫しきりに照れつつ満面の笑み

久びさに和服を着れば犬までも怪訝な目つきで小屋に入りゆく

高二なる孫の作りし風鈴のかすかな響き大好きな音

廊下に飼ふ鈴虫夜半鳴き続く疲れはせぬか薄きその羽

鈴虫のえさにと光る秋茄子を与へて吾も夫も満足

隣から伸びのびて来し南瓜づる夏を惜しむがに花の小ささ

生くるとは悲しくもあり美しき庭木に蟬の脱け殻固く

曾孫咲季

島根 金津 文枝

急に忙しく出掛ける時便利で助かる味噌汁喉通し老には良し

気持ち良く敷布洗濯よく乾き今夜より当分の間ベッドは楽し

絵手紙に書いた後秋海棠の花庭に植え一面に広がりピンクの花盛り

わが庭に今年始めて大輪の芙蓉次々花開き嬉し楽し

曾孫咲^{サキ}季^キちゃん五才敬老の日にお便り戴き幼稚園に感謝の礼状を出す

一週間毎に大山へ登りバスは無く歩いて道端の一本一草忘れ得ぬ

午前五時明けの明星きらきら天気良く九月二十一日

秋彼岸夜更け八幡宮の森に啼^{ミミズク}く木菟の声聞き乍ら眠りにつく

祖父の江差追分良き声で口づさみ何時も思ひ出す民謡の番組

くつわ虫はつきり見た事無くこんな緑の美しい色だったのか見惚れる

古 稀

大阪 伊 藤 忠 男

古来より稀と言われた七十も何と楽しみ多き頃かな

揺れ動く心と身体制御して大地に立つはこの歳の年

気持ちほど身体動かぬその日々に初めて知るや七十の歳

淡々と過ぎし月日がよみがえるきつとまたくる変わらぬ明日が

幸せは何処に有りしか問わずとも明日の喜び己が手の中

己が己大事なりとて人は皆他の人無しに生きては行けぬ

人生は悔いず焦らず諦めず夢に向かい進むあるのみ

夢は夢現実見れば道遠し夢の夢にて終わる夢なり

雛鳥

豊橋 胃 甲 節 子

一首の歌も詠めず刻のみ過ぐる日々新聞の萩の写真切り抜く

巢立ちたる雛鳥二羽は庭の木に動けずをりぬ親鳥待ちて

待ちわびて声あぐる雛に親鳥は漸く近くの枝にて見守る

ひよ鳥の雛見守りし二時間の朝の嬉しさ雛は愛らし

ブルームーンと解説聴きて仰ぐ空晴れ渡る空見事な満月

余りにも美しき月晴るる空幾度も今宵の満月楽しむ

蔓草はのびのび登り育ち来て白南天の房迄覆ひぬ

ルーペ持ち教へられたる小さき花紫の小さき花を確かむ

延命治療の是非を問はれて驚きつも吾は「いいえ」と強く答へぬ

水引草が数多咲き初む可憐なり赤も白も見つめてゐたい

ひんがしの空

豊橋 伊与田広子

彼岸過ぎ日中異状に暑けれど朝夕涼し気持良きなり

四十年病氣もせずに過ごし来し毎日体内温むるのみ

秋の夜に鳴く虫年々少くなり今鳴きいるは何虫か一匹

廻り皆舗装されたり十坪程蜜柑柿の木わが庭のあり

柿の実は沢山落ちしに蜜柑の実一つも落ちずそのままなり

九月末店には柿の出廻りぬわが家の柿は未だ青きか

柿の木に水遣る頃と思ふなり一両日に台風来むと

ひんがしの空は真赤に染まりをり今に太陽昇らむとして

ひんがしの空は赤らみ遠くより鳩の鳴き声聞へ来るなり

何となく希望の湧く如く感ず朝日の出ずる空を眺めて

栗の実

新城 半田 うめ子

藪中に数多に咲きつつ紫の木牡丹の花輝きて居り

ころころところがりて居り数多にて栗の実両手に拾ひし吾は

若き日に経理もしたりき思ひ出の五つ玉算盤ソロバン古りしのあり

子供等は拾はずに行く道の辺に一円玉の数個ありしも

東の竹むらの中さがしく犬の死がい二ひきあるらし

信号を待つ間に吾の自転車は不明となりぬ新らしくして

千日紅貰ひ来たりてびんにさす赤にピンクの美しき花

くろうりの一夜漬は味のよく食欲出でぬ楽しかりけり

くろうりを数個頂く松原の高柳様のつくりしなりぬ

初秋の気配

名古屋 近藤映子

物言えぬ夫に付添い声掛ける見開くまなこじつと見つめぬ

教え子の大勢の見舞に我夫は眼を大きく開き見てをり

この夏を乗り越えて欲しいと見舞ふ毎日祈りつつ

暑い日に教え子達の各々は夫のベッド囲みて話しぬ

わが夫は教え子達の見舞ひ顔一人一人をジット見つめて

時折にパット微熱を出す夫の氷枕を頼みて帰宅す

オリンピックに続きでロンドンパラリンピックの車椅子の競技を

車椅子テニス競技の好妙技思わずハット両手を握る

夫見舞ひテレビ点ければパラリンピック夫の手足擦りて共に見る

我夫を見舞ひて手足擦りつつぬくもり来ればわれホットす

武者隠し

春日井 清澤 範子

武者隠し付くる部屋には西陽差し簾つるすもなを暑きかな

安定剤のみつつ勤めゐる娘吾の歩みに手を引きくるる

陶の鉢に日々草を植えにけり鉢一杯に紅白の花

いつの間にか蟬しぐれはなくなりて台所に立てば鈴虫のなく

スーパーに行く道の辺の田は一斉に稲穂出揃ひ赤とんぼ飛ぶ

堤防の桜葉黄色に変わったり黄の葉落ちゐる所どころに

寡黙なる吾と生き来て五十年丁度いいよと夫は言ひたり

頭を垂れ稲穂はちよつぱり秋風にさわさわ揺れる吾が行く道に

神社に詣で自転車乗り行く道の辺に萩の一群ひとむら紅く咲きをり

美容院へ娘と連れ立ちカットするシヨートが似合ふ娘も吾も

哀しいから

蒲郡 杉浦恵美子

我が夫と暮した田原のお祭を余所者として出掛けて見むとは

祭見物我が傍らに夫が居ぬ賑はふほどに侘しさ募る

汚すこと少なき筈の我が暮しされど雑巾持てばあちこち

哀しみは勿論のこと歡びも嗚呼夫在れば居てさへ呉れれば

哀しいから泣くにはあらず泣く故に哀しみ募るとものに云ひたり

さは言へど遺影を見れば込み上ぐる居ぬこと思へば涙止まらぬ

夫逝きて私の時間も止まりけり愉しきこととは夫在ればこそ

傍らに夫が居るとは何を指すそれは即ち反応有ること

洗濯は済みぬこの次何しやう問へど応への無い暮しはも

母逝きて二十年間仕舞はれし古きミシンと今朝別れゆく

胡 麻

豊川 堀川 勝子

好奇心抑え切れずに難儀して胡麻の栽培挑みてをりぬ

胡麻の花は淡紫の筒の花触りゆく吾が手に胡麻の香移る

胡麻の茎と見まごふ色の青虫が吾が胡麻の葉を喰ひつめて行く

昼も夜も胡麻の葉喰ひて太りゆく面形雀蛾と調べて憎む

熱中症にて臥せつつゐれば氣負ひ来し胡麻の葉箸る樂しみ失せぬ

パソコンに胡麻の栽培打ちいだし賢い農家の真似のまねする

日々に歌集「スモン」を臨書して寿恵先生の面影たどる

歌集「スモン」を写経のやうに写しつつ知りたき想ひの未だ知り得ず

あれあれと思ふ間もなく我が植ゑむ欠け葉ばかりの万年青の株を

季来れば万年青太りて株増しぬ分けて隣家に譲らむ思ひ

故郷の川

豊川 平松 裕子

嫁ぐ日まで吾が住みなれし家の跡護岸拡幅に川となりたり

ジユズ玉も葦さへ生ゆる砂洲はなく川は平らに浅く流るる

ジユズ玉や葦の茂れる洲は消えて川幅広く水面光れる

ジユズ玉や葦の茂れる御津川に竹箕抱へて我ら遊びぬ

川面覆ふ臭木の下の淀み深く緑なす水の今は見られず

ザクザクと茂みに竹箕を押し込みて足にて魚追ふ暗くなるまで

得休知れぬ枯れ色の虫すくいあげたちまち捨つるヤゴとは知らず

鮒鮎は子供心に上等の魚と決めて川を漁りき

幼き日川に遊びて育ち来し護岸整ひし川よそよそし

御津川とも汴野川とも名を言はずあまりに近し故郷の川

桃子のハガキ

豊川 山口千恵子

エンジンの振動音の響く中いつしか眠りぬ「さんふらわあ」に

ひんやりと冷めたき畳に正座する酒造業なる白秋生家

長崎の夜景うつくし灯の下に会ひ見ることなき人々暮らす

出穂の稲田は青くしづまりて吹きくる風に微かな香り

水張りし休耕田に白鷺の群はしづかにかたまりて佇つ

白鷺は休耕田に屯するじつと佇み動かざる群

窓の辺の楓の枝に通ふ鳩枯枝などを運びゐるらし

海も空も星も美しそして夜は真つ暗なりと桃子のハガキ

沖縄の海はきれいと桃子のたより末尾に明日は基地を巡ると

沖縄の離島の夜は静かですおばあちゃんの家の夜より

仙人掌

豊川 小野可南子

言の葉も字画も危ふき日々にして掌サイズの「日常国語」

一本道の向ふに白きセダン見ゆ我が軽四を待ちて下さる

遠く見る藪を覆ひて咲くましろ仙人掌と指し示さるる

上向きに萼四弁の真白こそ仙人掌のこの花すがた

ふうはりと湯気白じろとコーヒーを今朝のテーブルに二つのカップ

テレビ画面は今し蓮の実とり出すところ「花托^{かたく}」とありぬ素早くメモる

彼岸花の二三本を手握り「ママにあげる」とこの一年生は

明けやらぬ空に煌くオリオンよ私の今日は楽しくあらむ

みのり田の続く中道ゆきゆきぬ「とよの秋」とぞひとり声にす

素焼き鉢に咲きはじめたる藤袴アサギマダラを待ち待つ我か

ノ木偏に火

豊川 夏目勝弘

ことごとく雲焼きつくす太陽ぞ深き影へと生き物ひそむ

体重の一キロ二キロ増えるとも夏の太陽に逆らふべからず

考えることなく散歩は中止とす仕事のなきをこれ幸ひと

汗ふきつつ遊びの考え浮びたり山手線に終日乗るを

ひすがら

節約の出来るほどなき年金なり節電をするクーラーもない

藪蚊ども寄りくるはなしそれはよし吹き来る風の重たく痛し

坪ほどの庭の日影の草を取り今日の仕事は終りと決める

週間の天気予報の曇り日を墓の草取る日と定めたり

我が前をオンブバッタが逃げてゆくただそれのみの朝の野の道

明け近くトイレに起きし窓の下短かし弱しコウロギの初音

ひととき

豊川 白井 信昭

朝焼けに出でこし浜の砂の上犬と涼めるひとときのあり

この先は行き止まりとわかりゐるされど今一度確かめむとす
層雲の広がる空暮れゆきて茜に染める大きな落日

さんざめき

東京 清水 慶章

神輿と屋台と人々さんざめき混じりかすかに鈴虫の音ねの

現代学生百人一首

東洋大学

田舎からカボチャが届くふつくと祖父母の丸い背中のような

東京都立大泉桜高等学校二年 北原 奈菜

被災地となった故郷の前にして震える母の肩を支える

東京都立保谷高等学校二年 辻本 有紀

少しだけ独りの時間が欲しいからあえて乗り込む各駅停車

早稲田大学高等学院三年 小林 孝平

人を見て優れたところまねてきた多くの自分を置き去りにして

岡山市岡山後楽館高等学校四年 多田 大輝

ピアノ発表会

横浜 阿部 淑子

につこりと舞台にい出て母親と「ちようちょ」の連弾いと愛らしき
登場し札に始まり課題曲弾き終え去る一連の楽

ピッコロにフルートギターボーカルと観客を魅了す拍手は止まず
ナレーシヨンのさわやかな声と抑揚に弾き手の技も高まり聞こゆ
白き髪まじる紳士の「月光」を聴きつつ偲ぶベートーベンの姿

夕顔

東京 富岡 和子

あかね雲高層ビルをとりまきて街の喧騒しばし忘るる
ブルームーン夕顔白く冴えわたる私の小庭明日は長月
秋暑し団扇せわしくあおぎつつよるがおの下友とおしゃべり
亡き母の漬けし梅干思いつつ夜干しの縁に歳時記のあり
彼岸花急にめだちて時は過ぐいそいそとして小庭の手入れ

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

わが町は海の町なり今日もまた沖を動かず二つの船が

稲吉友江

ゴンドラは北アルプスの空の中われら越えゆく焼岳の峰を

鈴木美耶子

一日置き孫の動画を送りきぬ嫁の静香の優しき心

吉見幸子

金槌と釘抜き置きて始めるよ孫と我との「靴干し」作らむ

牧原正枝

この暑さに耐へて秋まで咲きとほすかしばし眺めをり白百日紅を

岩瀬信子

庭の垣に凌霄花しだれ咲く昨夜の雨にはや落ちし花

石田文子

わが幼二人ならびて盆踊りの輪の中にをり小さき手ぶりに

山崎俊子

登りたる八方尾根は霧多し霧の晴れ間にわれら歓声

牧原規恵

トーストに無花果甘きジャムを載せけふがはじまる二人の朝餉

三田美奈子

私の一首

突然の手足動かぬその悲劇なんで段差がそこにありしか

伊藤 忠 男

寝苦しい夏の夜、床に就くか就かない時刻、携帯ベルが鳴った。友人の奥さんから「主人が道で躓き、頸椎を損傷、今手術室に入ったところです」と悲痛な声が響く。その夜は眠れぬまま朝を迎え、何はともかく、病院に行く。奥さんから、「手術は成功したけど、四肢麻痺、手足は動かないです。主人はこんな無様な姿、同級生には見せたくない。会いたくないと言っている」と涙声。慰めなんか何の意味もなく、何とっていいのか分からず、その場を退出した。

その帰り、彼が躓いた場所に立ち寄った。車止めぐらいの一段の段差を見て、腹立たしさに「何でこんなところに、こんな段差が」と、つい、愚痴がでたものです…。今は、辛いリハビリに耐えている彼に「焦らず、くじけず、諦めるな」と叱咤激励し見守るだけ。歯がゆい限りです。

胡麻和えを食みたく吾は前畑のパセリをつむよさわやかにし

半田 うめ子

七草のせりに良くにておりてそれよりも、葉の美しく又大きくてビタミンも豊富と、友から私は貰って植えて少しづつ食みて居ります。

日蝕メガネの黒き世界に太陽は三日月型に光りてゐたり

弓谷久子

小学校の校庭で硝子を煤でいぶしたカケラを手に騒いでいたが日蝕が見えたのか見えなかったのか記憶はさだかで無い。子の用意して呉れた日蝕眼鏡を手到庭に佇つ。

運よく東の空からのぞいた太陽が黒い眼鏡の中に小さくはつきりと見えた。黒い世界の中にくっきり光る金色のリング、まるで夜空に浮かぶ三日月のように、これが日蝕。私にとって最初で最後の日蝕なのだ。

果てしない大きな宇宙の祭典だと思った。

梨の花遠くに見ゆるキッチンに水なみなみと食器を洗ふ

安藤和代

梨の花が咲くそれ迄は食器洗いを水の冷たさに食洗機にたよっていた私。キッチンの窓の外には田畑が広がり四季の移ろいを楽しむ、百メートル程先の梨畑に若葉が輝くとやがて白い花が見える。小さくて地味だけれど私の好きな花のひとつだ。梨畑を渡り来る風と水の冷たさが心地よい小さな花が実を結ぶのも近い。私はいつもよりていねいに食器を洗った。いつも見る景ですが梨の花を見ると心がなぜか和みます。

『俳句』

街角のからくり時計秋高し

植村公女

レシピ付の野菜届きし涼新た

しばらくは塩辛とんぼと並びをり

名月や人の歴史とともにあり

一石

赤トンボブランコだけが揺れてゐる

夏帽子池の平和を乱しをり

防人の秋風に詠む東歌

喜仙

乳の下きりりと結ぶ浴衣帯

六回の手術の果ての虫の闇

暗闇の暗さを吹きて野分かな

皓一

吹き荒れて列島横断野分かな

台風の過ぎし朝あしたの青い空

贈呈誌

倉浪 ゆみ

愛媛アララギ 十月号

清水 正男

柊 九月号

塩見 瞳

アララギに共に学びて若かりし友を思ひぬひとり残りにて

西本 すみ代

踏みゆく樹々の若葉の萌ゆる中六地藏の顔ほほえみたたう

平安に過ぎし一日と思ひつつベランダに寄りて見る丸き月

高橋 順子

鹿児島アララギ 九月号

山本 和男

群山 九月号

山家 常雄

物売りの電話ひとつ断りて風にまどろむ独り居の午後

千葉 源治

樹の下の土の匂ひもわがものと心安らぐ狭き庭にて

伊達 宮子

わづかにも濃淡ありて青田には風の渡りて走り穂の出づ

高知アララギ 九月号

山中 一夫

榎の木 九月号

塚本 明夫

青空に遮るものは何もなしドクターヘリがいのちを運ぶ

小松 もとみ

昨日植ゑしゴーヤ四株に水そそぐ日の射す土の堆肥が匂ふ

鈴木 秀子

三百年の歴史を語る坑内に子負ひて女の石碎く像

冬雷 九月号

増澤 幸子

俳句誌かさね 九月号

小林 美登里

葦原の杭に並びてユリカモメ羽根休めある向きさまざまに

棚田にも風は吹き抜け村は春

子規の短歌革新とアララギの歌人（4）

佐藤 喜仙

上京した子規は「須田学舎」に学んだが、十月には共立学校「現開成高校」に転校した。

そこには高松で小中学校からの友人秋山真之もいた。その間、彼は久松家の書生部屋やあちこちの下宿を転々とする生活を送っていたようだ。その様に東京の生活を経験して、まず当時の薩長中心の政治を認識し、政治への関心が薄れ、拓川の影響もあり哲学、文学へと彼の関心は移ったようである。

明治十七年の三月には、旧藩主久松家の育英事業の常盤会給費生に選ばれ、月額七円と他に書籍代等を支給されることになった。当時の下宿代は四円が相場であったから、この支給は子規の生活に一応の安定を与えた。同年九月東京大学予備門にも合格して東京での勉学体制は整ったと云えよう。

明治十八年夏には松山に帰省し、友人秋山真之を通じて、当時松山第一の歌人と言われた井手真棹から歌を学んだ。もちろん自己流で和歌を作ったりしていたのであるが、子規は「余が和歌を始めしは明治十八年井出真棹先生の許を尋ねし

時より始る」と後に記している。尚「俳句を作るは明治二十年大原其戎宗匠（きじゆう）の許に行きしを始めとす」と述べているが、これまた自己流俳句は明治十八年頃から作っていた。子規が俳句より和歌を最初に学んだという事実は確かなことである。

予備門時代子規が熱中したのが弄球（ろうきゅう）（ベースボールの子規訳語）であり、幼いころの「青びようたん」が見ちがえるほど元気に弄球に熱中して周りの人々の目を見はらせた。「此頃はベースボールにのみ耽りてバット一本球一個を生命の如くに思ひ居りし時なり」と後に書いている。又「野球（のぼしる）」という号も使っている。これは幼名升（のぼる）をもじって名付けたのである。子規門の双壁河東碧梧桐と高浜虚子との出会いも実は野球を通してであった。松山に帰省した明治二十二年、まず碧梧桐が「ベースボール」を習う。手を赤くして捕球の練習をした後、ルールを教えてもらっている。これを虚子をはじめ松山中学校の仲間伝えた。翌年虚子は帰省した子規からバッティングの指導を受けている。子規が訳した野球用語は今も使われている。例えば打者（ストライカー）、走者（ランナー）、直球等（ストレートボール）である。これらの功績により二〇〇二年「野球殿堂」入りし、上野公園には「子規記念球場」が作られている。

ある自然科学者の手記（6） 大橋 望 彦

「最近のiPS細胞のトピックスから」（1）

平成24年10月8日記

とうとうマウスの仔が人工卵子から生まれた

平成24年10月5日の朝日新聞朝刊の一面にトップ記事として報ぜられたニュースがこの内容だった。京都大学の山中伸弥教授の作られたES細胞研究所のチームが成功したということである。

iPS (induced pluripotent stem) 細胞がマウスの体細胞である繊維芽細胞（皮膚細胞）から世界で始めて作られて（2006年）、未だそれほど経っていない。これまでに知られていたES細胞（embryonic stem cells）のように身体の何処の細胞にも分化誘導が出来る未分化細胞（幹細胞）はあるが、この細胞は発生初期の胚細胞からのみ取り出されるもので、

その扱いにある種の生命倫理的な制約があった。然し、ES細胞の作成は、体細胞の全ての細胞に分化し得る能力（分化万能性：pluripotency）を持つ細胞を、動物の身体の中にある再生可能な組織から取り出した細胞で作ることが出来たのである。何が画期的かと言うと、先ずは皮膚とか血液とか、採取された後で比較的安全に再生可能な組織細胞が使えることであり、それを未分化の状態に戻して（リプログラミング）、再び分化万能性を持った細胞（幹細胞：stem cell）にすること（誘導する：induce）が出来たことにある。そもそも体細胞は全て同じ遺伝子を持ち、そこにあるDNAの塩基配列順序は殆んど同一である。したがって、分化することというのは各細胞の持つ遺伝子の発現量が違うことであり、どの遺伝子の発現量が何時発現するのかと言うのは、それらを制御しているクロマチン（核酸に結合するタンパク質の一種）の修飾であるとか、DNAのメチル化等のエピジェネティック（遺伝子外の要因）の情報の違いに由来すると考えられている。それらの情報をリセッ

トすること自体が大変なことなのである。このリセツトすることのヒントが、実はクローン胚作成の成功にあった。これは、体細胞の核を取り出し、核を取り除いた未受精卵の中に注入することで注入された核内の遺伝子発現パターンが未分化な細胞のパターンにリプログラミングされることが判ったのである。即ち、卵の中に何らかのエピジェネティック因子が存在することを意味していたのである。このエピジェネティック因子もまたそれぞれの遺伝子支配下にあることも想定出来る。このような事で、分化万能性を持つ細胞、即ち未分化の状態を維持している細胞を作るために必要なエピジェネティック因子を作る4個の遺伝子を見出す（実際には24個の遺伝子に絞った後で、更に4個の遺伝子まで絞り込んだ）ことに成功した。この4遺伝子は発見者の名をとり、山中因子 (Yamanaka factors) と名付けられている。これら生殖細胞形成過程での多くの発見より、結果的にマウスの特殊な繊維芽細胞（体細胞）からこの山中因子の存在下に長期に継続培養の可能なES細胞様

の株細胞を樹立することが出来たのである。これがiPS細胞なのである。

これらマウスを用いたiPS細胞の研究結果が発表されると、世界的にこれら関連の研究が盛んになり、互いに競争が激しくなってきた。特にこれらマウスの知見を基に、ヒトのiPS細胞の作成に拍車が掛かった。山中チームではヒトの山中因子に相当する相同遺伝子をヒト由来の繊維芽細胞等を用いて細胞内に導入し、ついにヒトのiPS細胞を樹立した。時を同じくして、J.A.Thomsonからも別個にやはり同じような手段でヒトのiPS細胞の樹立に成功している(2007: 11・20)。この樹立がもたらした影響は、科学的に成功したことの意義は元より、ES細胞（生殖細胞由来の為）から作られたiPS細胞では生命倫理的な問題が回避出来なかったが、体細胞由来のiPS細胞についてはこの問題をクリアすることが出来、ローマ法王庁も歓迎の意味の声明を出し、難病対策に一つの光明が得られることとなった。

絹の話 (24)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の機能性 その1 (シルクパウダ)

絹が食べられる！食べると血糖値が下がる、体脂肪が減る、ほけ防止、二日酔い防止になる、等の発表が2000年頃から東京農工大の平林教授によって次々に発表され、野蚕シルク専門店を目指し始めた自分にはショックと云うか、将来の光明を見たと云うか、シルクの機能性の事にそば耳を立てる様な日々でした。その頃、産学共同で研究を進めると云う日本野蚕学会会長は研究者でも博士号もない商人の私を日本野蚕学会の委員（理事）にしたのです。（後日日本学術会議から論文発表の無い委員はいかなものかと会長が注意を受けたそうですが、会長は意に介せず事を進めていました）

1994年長野穂高で国際野蚕学会が開催される事になり、私は企業展示の委員長として大きな体育館いっぱい展示ブースを展開しました。その時は既に企業として製造しているシルクパウダ、シルクドリンク、シルク入りクッキー、キャンデー、うどんなどシルクと健康を謳った商品が思いの外集まりました。また、機能性利用商品として、紙類が色々集つ

て来ました。防腐絹紙（絹の防腐効果と防紫外線性、吸臭性を利用して、高級マグロの切身に貼る紙、後日水産庁の推薦用品になったと聞いています）、障子紙、壁紙（反射光の美しさ、防紫外線性、吸臭性、抗菌性及び湿度と温度が高くなつた時僅かに出るマイナスイオンのやすらぎ効果を謳ったもの）、更に、化粧品分野は多種多様でした。ただ残念な事に展示品に絹配合目的（絹による美白、保湿、抗菌、滑らか効果など）、配合率、絹の分子の大きさ、絹使用部位（フィブロインかセリシンか）等の記載をメーカーに懇願しましたが、企業秘密と云う事で、「絹入り化粧品」として展示しました。

中国の参加者だけで50名、インド初め東南アジアの各国アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、中南米、世界の絹学者が一堂に集まりました。日本の発表は野蚕の持つ色素、機能性に関する事が多いのに比べて、諸外国は自国の絹糸昆虫、その糸に関する発表が中心で、日本の研究は世界をリードしていると思いました。

この年を前後して各大学や研究所に昆虫機能やシルク新素材開発研究、遺伝子組替チーム等が急速に整備されて、シルクの非繊維利用の研究が飛躍的に進歩しました。

平林先生の発表は大ホールではなかったので、食品、薬品等の企業参加者を中心に超満員で、私などはドアの中にやつと入れた状態でした。

この時はまだ蚕糸業法が有り、繭を糸以外に利用する事を禁じていましたので、一旦糸にして塩酸で加水分解し、水酸化ナトリウムで中和し、凍結乾燥してパウダにすると云う方法でした。一方、酵素を使って食品としてより安心なパウダを作ると云う手法も実用化され始めていました。

絹を食べてしまおう、と考えたのは平林先生ですが、そうさせたのは丹後の絹織物の人達でした。絹織物で出る屑糸等がもつたいたないが良い利用方法が無い、何か名案は無いものかと平林先生に相談した所、絹は人間に必要な18種類のアミノサンで出来ているのだから、食べたら健康に良い筈だ！しかし糸をたべても人間は消化出来ない。そこで上記の様な方法が生まれたのです。この方法でシルクの醤油等応用範囲は限りなく広がります。

ではシルクを食べるとどんな効用が有るのでしょうか？絹の1/3を構成するアラニン（アミノサン）がアルコール代謝を促進しますので、二日酔い防止に効果的です。

また絹の1/2を構成するグリシン（アミノサン）は血中の

コレステロールを低下させる働きをしますので、高血圧予防に効果があります。

絹のアミノサンの6%がチロシンです。身体の震えや痲呆症を抑制してくれます。

古代の人が言いました。「繭をしゃぶるのは不老長寿の薬」これはにわかに信じ難いのですが、絹糸を覆うセリシン（米で云うと糠の部分）のアミノサンの効果が有るのかも知れません。

今日ではシルクパウダ製法も遙かに進歩して、アミノ酸の分子の繋がる大きさにより効果が異なる事が解つて来ました。

——お知らせ——

「ワイルドシルクフェスタ」 ほん国百貨店6階季節の催し会場

2012年11月7日（水）～13日（火）

講演（絹の機能性）11月11日（日）

明治の元勲井上馨の湯河原の別邸（清光園、当時のまま）を訪ねてみませんか。

1泊2食10,500円より。

問合せ TEL&FAX 0465-62-2038

物理学者と詩歌の世界 (34)

一石

マックス・デルブリュック

マックス・デルブリュック (Max Delbrück, 1906—1981) は米国の生物物理学者。1969年度のノーベル生理学・医学賞およびリザ・グロス・ホロウィッツ賞受賞者。

マックスは1906年、ドイツのベルリンに生まれる。父のハンスは、ベルリン大学の歴史学教授。母のリーナは、ライプチヒ大学の外科学教授のカール・ティエルシュの娘で、また世界的な化学者ユストウス・フォン・リービッヒの孫娘であった(参考資料1)。

少年時代、マックスは天文学を志し、チュービンゲン大学では天文学を専攻するが、後ゲッチンゲンにおける大学院時代に特に量子力学に魅せられ、理論物理学に転向し、化学結合に関する量子論、原子核物理学を専攻する。ゲッチンゲンでは、マックス・ボルンに師事し、1930年博士号を取得する。ここではその後長く続く理論物理学者V・F・ワイスコフとの交友も深め、また、哲学に造詣の深かったW・ブロックから強い影響を受ける。

大学院修了後、最初の2年間をイギリスのプリストル大学

で、あとの1年をコペンハーゲンのN・ボーア(参考資料2)の研究所と、チューリヒのW・パウリ(参考資料3)のところで過ごす。コペンハーゲンでは、量子力学の相補性概念を物理学と生物学との関連について広く応用できるのではないかと考えていたボーアに強く影響を受け、この頃から遺伝学に対する興味をもち始める。

1932年、リーズ・マイトナーの助手として、ベルリンのカイザー・ウイルヘルム研究所に移る。この年、ボーアが行なった「光と生命」という講演が、デルブリュックの科学者としての思考と経歴に決定的な影響を及ぼす。同時にこの頃、光子が外電場で散乱されるいわゆるデルブリュック散乱の現象を理論的に明らかにした。

1934年頃から、少数の物理学者と生物学者のグループが非公式に討論を行なうようになる。ここから、N・W・ティモフェエフ・レソフスキー、K・G・ツイマー、デルブリュックの3人の論文が「遺伝子突然変異の本質と遺伝子の構造について」という表題で発表される。これは、後にE・シュレーディンガーがその著書『生命とは何か』で取り上げたことにより、広く知られたところとなる(参考資料4)。1937年、ロックフェラー財団の第2回目の奨学金を得て、アメリカ、パサデナのカリフォルニア工科大学に移る。ここでエモリー・L・エリスと共にバクテリオ・ファージの遺伝学的研究を始め、1938年にファージの一段階増殖実

驗法を確立する。1940年から1947年まで、テネシー州のヴァンダービルト大学で物理学の教鞭をとる。1943年、最も活発な分子生物学者達の集まり「ファージ・グループ」を結成。この年、サルヴァドール・E・ルリアと共に「バクテリアにおけるウイルス感染性からウイルス抵抗性への突然変異」と題する論文を発表。ルリア・デルブリュックの実験と呼ばれるこの研究は分子遺伝学を創始したものとして高く評価された。1947年にカリフォルニア工科大学の生物学教授となった。

デルブリュックは研究人生の後半を、ロングアイランドのコールド・スプリング・ハーバー研究所で送る。1940年代に彼は、ここにバクテリオファージ遺伝学の研究所を創設。1950年代初期、ファージの研究が絶頂期に入った頃、デルブリュックの興味は感覚生理学に移って行く。ここでは、ヒゲカビの胞子嚢柄をモデルとして、感覚器官全般、特に適応と情報伝達についての研究を行なう。途中、ケルン大学に分子遺伝学研究所を設立するため、故国ドイツを訪問している。設立記念講演では、ボーアがデルブリュックの勧めに従い「光と生命―再考」と題した講演を行なった。

1969年、デルブリュック、ルリア、アルフレッド・D・ハーシーのファージ・トリオの発見が、「ウイルスとウイルス病の本性に対する洞察を深め、また間接的に遺伝現象や個体や組織の発生、成長、機能などを制御する仕組みに対する理解を

前進させた」として、ノーベル医学生理学賞を共同で受賞。デルブリュックの言葉から。

○分子遺伝学によって、生命の系統樹の連結性をきわめて明快に詳細に至るまで説明できるようになったので、「生命の謎は解けた」と言い切れつついい。

○分子遺伝学は、発生、成長、死、といった生物世界の特徴と、それとは対照的な物理世界とを調和させるための適切な道筋を教えてくれた。しかし、この言語を「意識」「心」「認識」、「論理的思考」、「真理」といった概念に結び付ける道筋については、何も明らかにしていない。

○子供達よ、本当のことを言うと、私達は皆、人形喜劇を演じているのだ。人形喜劇で何よりも大事なのは、作者の考えをしっかりともち続けることなんだ。これが人生における本当の幸福というものなんだよ。

参考資料

1) E・P・フィッシャー、C・リブソン著、『分子生物学の誕生 マックス・デルブリュックの生涯』、朝日新聞社・フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』マックス・デルブリュック『

- 2) 三河アララギ、P 36、第57巻、第10号 (2010)
- 3) 三河アララギ、P 36、第58巻、第3号 (2011)
- 4) E・シュレーディンガー著、『生命とは何か』、岩波新書

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

六、結城哀草果 3

業余の業が大きく輝くとき君に來し老を嘆きてわれの
ねむれず 昭和二十七年

大石田のきびしき寒さみ体に障るをわれ悔しがりにき
蔵王山に朝日てることあらしめよ若返りし君に言ふ夢
のなか

東北の農家に生れ農民の卑屈なく七十年を燃したまへ
る

紋服の君文化勲章かけたまふその和面がなんともうれ
し

結城々々と呼びたまふみ声は笑と涙急ぎてもつれつ

一首目は、茂吉が自分の作歌を「業余のすさび」だと言ったことを踏まえたうえでその「業」も「すさび」も輝く時が訪れた老いの前に無力になりつつあることを残念に思うというのである。二首目は、しかたのないこととはいえ、茂吉が老いの身を豪雪の大石田に暮らさざるを得なかったためについに病に苦しむことになったことを残念に思ったというのである。五首目は前年の昭和二十六年十一月三日に茂吉が文化

勲章を授与されたときのことを思い出しているのである。

太陽が地平のはてに沈むこと茂吉先生逝きたまひける

昭和二十八年

温き両手ねんごろに摩りあげむと急ぎ来にしにみまかりたまふ

二月二十五日はわれに真暗き日となりぬ茂吉先生みまかりたまひて

山形の蔵王山上に吹きたまる雪にかがよふ茂吉歌碑はや

詞書に「二月二十五日斎藤茂吉先生逝去せらる」とある。二首目の歌でわかるとおり、哀草果は臨終に間に合わなかった。かつての日に茂吉の両手を「摩りあげ」たことが何度もあったのであろうことが推測される歌である。二月、哀草果が山形を発つときは、蔵王は雪に覆われていたのであろう。

いまははや目の地下ふかくみ骨を埋めてむなくなりぬ 昭和二十八年

今生のわれの見をさめとたふとかるみ骨のうへに墓石重ねたり

あららぎの茂れるもとにとことはに隆応茂吉聖の墓二基

歌の背景は「昭和二十八年五月二十四日、山形県南村山郡蔵王村金瓶宝泉寺境内に茂吉之墓を建つ三首」という詞書が語っている。これは「アララギ」斎藤茂吉追悼号（昭和二十八年十月）に掲載された。

団子の串の太きに例ひきて素朴なるわが歌を励ました
まひき
昭和二十九年

春の野に翁草掘りつつ蛭泳ぐ丘のうへの沼べを随ひゆ
きつ

現身の君登りいます感動に歌碑建つ熊野岳を今朝も仰
ぎつ

焼跡の雑草なかに風呂ありて夜更けてゆきけり先生と
われと

示しあはして上京したる二月二十五日われを待たずに
みまかりたまふ

「山塊」斎藤茂吉追悼号に載った「追悼歌」と題する一連
中のものである。一連は出会ってから死別するまでのことを
回想している。

宝泉寺の本堂の寒さにうたれ来て茂吉を偲び食ふ鰻か
な

峠のうへに細く湧きわく清水あり茂吉歌碑の影をうつ
して

茂吉先生が猿羽根峠に糞をせしある日のことをわれ一
人聞く

茂吉歌碑に行くとなつたてば今宿の小田植ゑあけて水
反射する

つれづれに翁茂吉がのぼりけむ薬師堂の石階に初夏の
こぼれ日

戦争をはるかに逃れしおもひに眠つむりけむこの御
堂に

この岡にまともに迫る葉山嶺に斑雪さやけし茂吉おも
ほゆ

茂吉の遺髪と髭とををさめたる虹ヶ丘の歌碑よとはに
愛しき

これらは「書票」昭和四十一年八月号斎藤茂吉特集に載つたものである。一首目には「茂吉忌」と註がある。二、三首には「猿羽根山歌碑建立」と詞書がある。三首目には「われ一人聞く」とあるからこの「糞」の話はだれも知らなかったことを言ったことになる。四首目以下は「大石田歌碑」という詞書を持つ。最後の歌を除いては作者が何度も回想してきた内容であるが、それだけ忘れることのできない師との交流であったということである。

水戸紀行(2)

夏目勝弘

子規と節

子規と長塚節は共に旅行好き。子規の「水戸紀行」、長塚節の「旅行に就いて」より記してみたい。

子規の水戸地方への旅は、春十日の学暇が出来た。常盤會寄宿舎の友と相談が調い、思い立つが吉日と、明日を門出と草履と朝飯の支度をし、暁に出発。

着物は、ゴツゴツ木綿の綿入に白シャツ一枚を着流し兵児帯姿、着替え等荷物はなし。

長塚節の場合は、旅費の蓄えが出来ると予定していた方面の地図により、行けるであろう行程を決める。

参謀本部二十万分之一(今の国土地理院)により、里程を調べる。

そして旅装の支度、旅行は大抵夏から秋の初め、単衣一枚のまま別に肌着のシャツと越中褌一組を荷物に入れる。

肌衣は忽ちに汗じみて仕まうので、時々洗濯をする。川などがあればそこで洗い河原に干せば一時間ぐらいで乾く。

自分も最上川の川原で乾くまで、川原で瀬音を聞きながら昼寝したことを、思いだしつつ書いている。

外に地図、雑記帳、鉛筆、葉書そして特に大切なのが弁当箱。この弁当箱は節が考案した、長さ五寸余 巾四寸余、深さ一寸四分のブリキ製で、筆記用具が入るもの。これと着替えの荷物を振り分けにする。

これに笠を冠ってゴザを着ければ完成となる。笠は旅行毎

に一つ求めて記念とする。

記念館にある笠には、それぞれの旅先での短歌が書いてある。ゴザは暑さに前からの雨には紐をしまて横に、後からなら後ろに回す、涼しい木かげで休むときは敷き雨掛けの荷物を枕にして寝る。

子規は宿に着けば、まづ飯を食わせると、水戸紀行のなかで満足した食事は一度もない。

節は宿に着けば、宿料の談判をし安くさせる。そして必ず翌日の弁当を詰めさせる約束をする。弁当を持っていれば、好きな時好きな場所で食べることが出来る。

一方子規は十二時になるころ飯屋を探し食べるが、腹を満たすことが出来ず、焼芋やふかし芋を一銭二銭と買い満足をする。焼芋をたべた時のみ、美味いうまいと満足をし膝栗毛を続けるが長続きせず、人力車に乗ってしまう。

節はひたすら歩み木陰でゴザを敷き休み川を渡り峠を越えて行く。

子規の水戸紀行の帰りは、水戸より上野まで汽車で昼頃着き、旅費の残りで西洋料理店に向って行く。

節は名物癖でその地の名物は、何でも食べてみる。そして一銭二銭と節約した金で母への土産物を買う。ときには三国峠で採取した茸を薬包としたこともある。

こうしてみると子規と長塚節は正反対の性格のように思われるが根岸の子規の元へ通いつづけたのは何故であろうか。

子規と節の共通点は、子規三十五歳、節三十七歳、病に苦しみながら亡くなったこと。

現世的なことではなく、魂と魂が通じあったのではないだろうか。

「氷魚」のことから (142) 岡本八千代

夜明けの夢に亀の夢を見た。何かいいことあるかもしれない。――。

明日は、九月十九日、子規忌である。子規が三十五歳で逝つて、百十年になる。子規忌を他に糸瓜忌とか癩祭忌だっさいきともいうが、いずれも子規のあの病苦に悩みながらも、どこかユーモアを以った人柄の良さを思い出さずにいられない。

「仰臥漫録」(56頁)に、

「自分は一つの梅干を二度にも三度にも食う。それでもまだ捨てるのが惜い。梅干の核は幾度吸わぶつてもなお酸味を帯びて居る。それをはきだめに捨ててしまうというのが如何にも惜しくてたまらぬ。」

と書いてあったことも。彼の食べる行為の楽しさが、平凡のようで平凡でない。

さあ、ここからまた「当世媛鏡」の続き。

○二十二。――二五。(同年の桜咲く頃)

二十二。

○中谷たく子の子の家：長い廊下、広い部屋。庭には泉水があり風流の趣きがある。

お清とたく子と共にいて、政治家の妻などについて会話している。

○たく子は、政治家の妻は、ピアノの素養英語の読みがでさることを話す。

○兄(たく子)は政治家にはなりたくないこと。兄は、「お清さんのような人が善い」と言っているという。

二十三。

○「弥生の空うららかに桜つ花は紅の唇を開きて緑の木の間に笑ひ泉水の緋鯉は水面近く浮びて頻りに漣波を吹く日頃、お清は氣ふさぐばかりであった。」

○才吉と遊んだ幼い頃が思い出されてしかたない。

○今は、あの老婆と男の家で逃げることもできなかった時、「一杯の水を下さい」と、かの家に入って来た人に助けられて、中谷の家に住まわせてもらっていた。

二十四。

○才吉は、お清の出した手紙を読んで、はらはらと涙をこぼし、臍へぞの緒切つてこのかた始めて泣き暮れたのであった。

○手紙の中には、中谷のおかげで才吉は大学を卒業し、もはや、たく子と才吉は結婚したとも書いてあったのだった。二十五。

○才吉は、お清に対して思っていたこと。それは、中間の財産は自分が使い果たしたと同前。お清は自分の為に艱難辛苦かんなんくしんを賭してくれたこと。そして早くもお清は将来は夫とも思っていたことを諦めていたことを察したのであった。

○しかし、お清を捨てて、たく子を愛すると云うにもあらず。父親の遺言を思えば、政界に雄飛せんとすればたく子ならば、頼りになると思つたのであった。

次号へ

ことのはスケッチ(46)

今泉 由利

『羽毛恐竜』

世界最大という。幕張メッセをめがけ、地球上の広い範囲から化石達がやってきた。放つてはおけない。夏休みが終り静かになるだろう時期をひたすら待った。

恐竜達は、地球の隅々にまで、生息、適応、進化、繁栄をしていた様子は、化石の発掘により確かめられている。

長い間、「爬虫類の祖」と考えられてきた恐竜達が、「羽毛に覆われていたにちがいない」、との発見に、「鳥類の祖」ということになった。部分的には鱗状の皮層もあっただろうが、羽毛をもつことにより体温調節をする「内温動物」であること。ジュラ紀中期の巨きなノミの化石が発見され、恐竜の羽毛などに入り込み、血を吸っていただろうこと。

羽毛を電子顕微鏡検査すると、褐色や黒色の色素しかもっていないかったようだ。現生鳥類に照らし体表や内部の細かな毛の造りにより、光りの屈折、反射：多様な色に見える「構造色」ということではないだろうか。

夏毛、冬毛、毛替わり、色や模様、カムフラージュ、羽毛の形態、種類：現生鳥類から今までの恐竜へのイメージは、どんなくつがえされ、熱帯魚のような色彩の恐竜が出来る。

恐竜史上もつとも大きな、1000屯もあるアルゼンチノサウルスが闊歩していたアルゼンチンに住んでいたから。あんなに巨きくなってしまうことが頷ける。太古の時と今とは全く異なるだろうことは承知のうえで、巨大化を促す豊饒な大地であること、酸素濃度や二酸化炭素の濃度の都合が良かっただろうこと。

ブエノスアイレスとは「良い空気」という意味があり、他国からアルゼンチンの空港に帰り着くと「空気がおいしい」とまず思う。髪がサラサラになって、とても気持が良い。

今の人間の前、アルゼンチンの大地パタゴニア（大きな足の意味）には、パタゴン族という二メートルを越す人種がいたこと、オウナという裸で暮らす人種がいたということ、セリーナさんから教わった。

大きな油田もあり、大きくなる素質のパタゴニアの大地を歩くアルゼンチノサウルスの姿を思う。

中国の後期白亜紀の地層で、諸域で二万点をこえる恐竜化石が「化石壁」と発見された。

羽毛恐竜、動植物の化石、魚類の化石、昆虫類、カメ類、巻貝、二枚貝、水生、半水生植物：なぜ、化石になっ

てしまったのか。

今と同じような形の虫達が、「母岩」にベチャンコになっている。

アルゼンチンやブラジルから連れてきた、私の化石達と同じような形をしている。

地球の上に「本当にあったこと」を覚えてくれている。これからは加速度的に太古のことを知ってゆくのだろう。遠い過去の、正確なことを自分に教えてあげつつ生きてゆこう。

和菓子街道 (73)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

大津宿の中ほど、少し街道を逸れたところに店を構える藤屋内匠は、創業寛文元年(1661)という老舗中の老舗だ。先祖は、浅井長政の家臣で、織田信長暗殺計画を進言するなど知略に長けた武将・遠藤喜右衛門直経。菓子屋となってからも既に十三代目を数えるという。もとは鶴屋仁兵衛という屋号だったが、伏見宮より屋号を賜り現在に至っている。その時の許し状は現在も大切に保管されている。

宮家や膳所城にも菓子を納めていた藤屋内匠は、現存する日本最古の落雁の木型も所蔵している。創業の頃から落雁のような打ちものを得意としてきたが、中でも近江八景を打ち出した近江八景糖は実に秀麗だ。白い落雁の表面にうっすらと浮かぶ景色は今まで見たどの近江八景の美術品よりも美しく、ため息がこぼれる。この軽や



かな1枚に、日本の菓子文化が凝縮されている気がする。

安政末期の木型と同じ意匠で作られる近江八景糖。

◆藤屋内匠

住所：滋賀県大津市中央3-2-28

電話：077-522-3173

お知らせ

▽十二月号原稿は、十一月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※ワイルド・シルクウェスタ

ほの国百貨店6階。季節の催し会場
二〇二二年十一月七日(水)〜十三日(火)
講演 今泉雅勝

(絹の機能性・十一月十一日(日))

※明治の元勲井上薫の湯河原の別邸(清光園当時のまま)を訪ねてみませんか。

一泊二食付 一万五百円より

問合わせ・TEL・FAX・〇四六五一
六二一二〇三八

編集後記

暑かった夏も終わりもうすっかり秋になりました。夜風には寒さを感じられるこの頃です。

浄願寺のお庭から頂いた藤袴も私の庭に咲き初め、今は亡き静誠様が思い出されます。

今年亡くなられた、榊原様、伊藤様、静誠様、みんな三河アララギを支えて下さった方達ばかりです。亡き方々を思うとき、寂しさもありますが、三河アララギには今は亡き多くの先輩方が残して下さった、長い長い歴史があります。

私達も今、その長い歴史を更に伸さんとする者達であることを自覚して、一歩一歩、共に進んで行きたいものです。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分三万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年十月二十五日印刷 第五十九巻 第十一号
平成二十四年十一月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 千四四一〇三二一

豊川市

御津町 御馬 西三七

TEL

(〇五三三)七五二〇〇九

振替口座

〇〇八三〇一六二五六三九

E-mail

yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage

<http://maizumityuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創美